

「私のPR・自己紹介図」と知研の取り組み

エッセイスト 近藤 節夫（会員）

一、「図解」の効果と魅力

三年前の五月連休、知研八木哲郎会長が講師をされた「図解」の講習会に初めて参加した。以前に日米両語による話し方講習を受講し、[デール・カーネギーコース]のディプロマ（修了証書）も取得し、英語によるグラジュエイト・アシスタントの経験もあった筆者は、人前で話をするに関して格別気後れはなかった。しかし、やはり大切なことは、「話し方」の話法・技法・テクニックより、テーマであり、その中身である。その点で、その手法と内容に関して斬新なイメージとひらめきを与えてくれる「図解」は、誇張して言えば革命的と呼んでもよい。KJ法的思考から発展させ「図解」にも興味と関心を抱いていた当時の筆者は、何とか「図解」の本質と極意を知り、出来ればその奥義を極め、些かなりとも「図解」の普及と啓蒙に一役買えれば幸いと考えていたが、その後講師として独り立ちの機会を与えていただき、現在微力ながら「図解」啓蒙のお手伝いをしている。

さて、久恒啓一理事長が啓蒙されている「図解」研修の過程で、受講者に最終章で講義するのは「私の仕事図」というテーマで、受講者が外部から見て分りやすい職場の自己中心的仕事図を描き上げ、自分の職種・職務とその内容を論理的に説明することである。そして、それがひとつのきっかけとなって受講者が図解的思考を発展させ、あらゆる図解の取り組みに意欲的に挑戦することである。当初はボードや模造紙に描いて講義していたが、偶々筆者が知研を通して講師を委嘱されている、福島県にある「ふくしま自治研修センター」では、二年前から先進的にマイクロソフト社製PCソフト【VISIO】を使い、一六人の受講者一人ひとりが専用のPCにより、研修を行っている。

福島県の研修例を簡単に説明しよう。二日間の宿泊研修で、最初は慣れない「図解」にやや戸惑い、PCで図を描くことに多少躊躇していた受講者も、「図解」に関する基礎知識の講義、簡単な「図解」例の説明といくつかの演習問題実習により、次第にその技法に馴れ、発想と思考を少しずつ「図解」の本質と核心にスライドさせていった。「図解」の持つ特異な視点、一覧性のメリット、図の中心に自分を据える意外性と大胆さ、住民の視点の重要性、通常書類に見られない明るい色彩等に受講者は興味を覚え、次第に作図に惹き込まれていった。「図解」へ取り組む視点は発想の転換も促す。こうして二日目の仕上げでは一人前の作品が出来上がる。「私の仕事図」を発表する場では、一人ひとりの受講者が自信作を思い切ってPRするのである。そして、二日間の研修を終え、自分が作った「図解」を研修後も、より良い「私の仕事図」へ発展させるよう努力すると約束し、それを広くPRして、実用に供したいと前向きに話してくれる。かくして研修の成果が評価され、実用化されるのである。

二、「仕事図」ではなく「PR・自己紹介図」

他所でも「図解」インストラクターを務め、「私の仕事図」を講義しているうちに、筆者も幾種類もの「私の仕事図」を描いてみた。一昨年四〇年間のサラリーマン生活にピリオドを打ったが、会社を辞めてみると「私の仕事図」を描くことより、自由の身で自分自身の紹介を兼ねて、自身のPR図を描くことの方が多くなり、また現代のようなビジュアル社会では、一般的にはその必要性の方がずっと高く、有効であることに気づかされた。改めて分かったことは、これまで肩書きとか、名前で勝負していたが、筆者自身年金生活に胡坐をかき、自由気ままに著述業を始めてみると、肩書きとかタイトルの必要性はほとんどなくなった。それより社会情勢の変化もあって、ボランティア活動やNPO活動に注ぐ時間が増えるに連れ、案外「私のPR図」とか、「私の自己紹介図」の方が人々に受け入れられ、その需要度合いも高そうだと思えるようになってきたのである。

脱(卒)サラリーマンの自分自身を見つめてみると、サラリーマン時代から書き続けていたエッセイや、評論を寄稿し発表する機会も少しずつ増えてきた。過去の経験を買ってくれてお話の機会を与えてもらうことも増えた。一方で六七歳という年齢を考えると健康とか、心から楽しめる遊びも少しは考える。還暦を過ぎてなお自分なりの奇想天外の夢を見ることもあるし、未だにひとりで海外武者修行に出かけることもある。しばしば学生時代の友人たちと気楽に旅行したり、一方で真面目に喧々諤々の議論をすることもある。夏になると高校の後輩たちとラグビー合宿で信州菅平へも行く。相も変わらず、健康で大時代的な夢を無邪気に見ていられるのは家族のバックアップがあればこそ・・・等々、他愛もない考えが行きつ戻りつしている時に、はたと思いついた。

サラリーマン時代には、名刺という便利なものを会社で提供された。ただ、この名刺には会社内の仕事上の権限とか、タイトル、ポジションしか表示されていない。小さな紙の中には、ほんの僅かの義理人情ですら籠っていないのだ。ましてやプライバシーなんかまるでない。ほとんど自分自身をありのままに表現していないのである。赤の他人がもらったところで面白味があるはずがない。名刺に魅力的な効果を付加するには、名刺にある種の隠し味とか、思い切って自慢話を付け加えればよいのではないか。肩書きなんかではなく、この際本当の自分にスポットライトを当ててみるのだ。プライバシーとか、情の籠った話題をうんと盛り込めばいい。言い換えれば、ビジネス・カードではない、ちょっと変わった「第二の名刺」「セカンド・カード」である。一人ひとりがもっている長所、特技、性格、実績、自慢話、家族、家系等々、差し支えない程度に取り上げてみてはどうだろうか。定形の名刺サイズである必要はない。筆者は段階的に「私のPR・自己紹介図」モデルの構想を練り、小さな図から少しずつ「自分的なるもの」「個人的なるもの」を拾い集めて温かい血を通わせ、魅力的でもっと汎用的な「私のPR・自己紹介図」を作り出すよう考え、試行錯誤を繰り返

した。

では、どうしたら「私のPR・自己紹介図」を望むとおりに描けるのか。ここでは、ひとつの例として、些か大胆不敵で僭越であるが、筆者自身の「私のPR・自己紹介図」を紹介することにしようと思う。

三、新しい図解、「私のPR・自己紹介図」

第I図はいまも変わらず発展途上で、日々少しずつ加筆している筆者の「私のPR・自己紹介図」未完成版である。いつ完成するのか分らない。否、夢のひとつである「大往生」を遂げる日まで完成することはないと思う。

まず、A4判用紙の最上欄には《Who's Who (名簿)》とか、《Personal History (履歴書)》と記し、自ら下手な似顔絵も描いた。

基本的に筆者自身を「紹介する」「売り込む」ことを主眼に図の中心に据える。これは「私の仕事図」と同じ手法である。それを取り巻く家族や友人、簡単な「六七年の人生暦」と足跡を、総体的に【性格・生活環境】と称している。性格、モットー、勉学歴、仕事暦等をゴチャゴチャ付け足して、出来るだけ多くの人に自分のハード部分を理解してもらうための工夫を凝らしてみたつもりである。旅行業者としての長年の経験から、恥を忍んで難儀した苦情処理記録等も記した。

上部三分の一には、現在の活動を表している【日常活動】を、文筆と講師に分けて記した。昨年上梓した拙著「現代・海外武者修行のすすめ」についてもPRして、表紙カバーに日本ペンクラブ理事・小中陽太郎氏がくださった推薦の言葉と、冒険作家・椎名誠氏からいただいた手紙文の同感・共鳴の言葉を記載した。宣伝ついでに、いま執筆中の「停年オヤジの海外武者修行」も記載した。

中心より下方部分は【活動暦・人生観】と称して、自分の人生の活動記録と夢を述べたものである。ラグビー、登山に熱中した詰襟服時代の思い出も載せた。学生時代に遭遇した「六〇年安保闘争」は、筆者の後半生の運命を左右したと言ってもよい。その国民運動の渦中で、「正義」とか、「道理」というものを教えられ、「反骨心」が培われた。そして、若いころの様々な自己研鑽と自己啓発に基づいた活動、旅行業者としての業務を通じて若干ぶれながらも信念を貫いた小人が辿った六七年の時の流れを、反映させるような足跡と事柄を列記した。その自己形成の過程を「知的生産と健康工房」と名づけ、一方でその結果として、その行動足跡と公式には誰も認めてくれる訳ではない、自分だけが自慢できる秘話、珍談、奇談、自慢話を「個人ギネス記録」なる大看板として掲げ、ひけらかすことにした。「個人ギネス記録」は、権威ある筋のお墨付きを得たものでも何でもない。ただ、筆者が自慢話を掲載してマスターベーションに耽っているまでのことである。だが、普通の市民なら誰でも多少の自慢話程度はある筈であり、誰かに話したいと思っているかも知れない。普通奥床しい人は遠

慮して自ら進んで話さないだけなのだ。筆者は目立ちがり屋の先兵となって、こんな方法もあるということを経験して、普通のオジサンやオバサンにも自信を持って大いに自慢話をやって欲しいと思っただけである。そのサンプルがこの第Ⅰ図右下隅に表示されている。戒厳令下ヨルダン軍に身柄を拘束されたり、ジャカルタで強盗に襲われたり、南ア金山の地下深く一七〇〇メートルも潜ったり、流氷のオホーツク海で遊泳したり、軍隊に護衛されながらタリバンの巣窟近くのカイバル峠でテロを予見したとか、危ない話や他愛ないエピソードを五〇件近く記載した。これをもっと多彩にして、仮に百件ほど掲載出来たら百花繚乱と言えるのではないだろうか。

もとよりわが華の人生？はこれからである。シニアスタートと称して、相変わらず荒唐無稽な夢を追いつけている。そのひとつは昔から考えていたことで、ラテン系の国でひとり下宿しながら、近所のお人好しやお調子者と一緒になって地域おこしをやったり、井戸端会議にうつつを抜かしてみることである。最期には静かに息を引き取って「大往生」を遂げたい。

この「私のPR・自己紹介図」を見て、ある友人が言った。「暇つぶしにはもってこいな。何となく紹介されただけでは分らないこと、普通は話さないユニークな話が満載されていて面白いし、一目瞭然で本当のおまえが多角的に分るのはよい」と、その効用についてヨイショしてくれ、こういう図解をもっと普及させるべきだと強く背中を押してくれた。この一覽性の自己紹介図は、必ずや人物を多面的に紹介する手立てとなり、奥深く知らしめる有効な資料として、世間一般に広まり、いずれ活用されるようになるものと信じている。

四、「私のPR・自己紹介図」の描き方

第Ⅰ図を仕上げる前に、まず最初に基本形である第Ⅱ図をモデルとして描く。中心はあくまで自分自身であり、その家族でもある。図の上部三分の一には、現在の仕事とか、ボランティア活動のような日々の活動を紹介する。下部三分の一は、これからの人生、現時点から前進する気概と希望、夢等を挙げる。本例では大きな項目を【日常活動】【性格・生活環境】【活動暦・人生観】の三つのカテゴリーに分割しているが、この分け方はある程度年齢を重ねた中高年者に向いている。若者（学生）なら若者（学生）に向けた分け方が可能である。例えば、まだ人生経験の少ない学生なら、三つのカテゴリーを【過去】【現在】【未来】と単純に分ける方が彼らの実態を表しやすいし、作図もしやすい。そして、【過去】ではそれまでの履歴である、生誕、学歴、個人記録、賞罰等を、【現在】には自分の体格、健康、性格、長所・短所、家族構成、親友、専攻科目、スポーツ、特技、趣味、モットー、読書傾向、支持政党等を、【未来】には希望の進路、夢、理想、将来の職種、入社希望企業、理想の結婚相手（異性）等を記入してはどうだろう。これだけでもかなり個人情報としては多種、豊富である。自分の意見や主義主張、政策提言、行動哲学、これに感性を活かして全体のバランス、色彩感覚に気を配れば、「人となり」をかなり正確に知ることが出来るだろうし、楽し

く見栄えの良い「PR・自己紹介図」、分りやすい「履歴書」ともなる。

次のステップとして第Ⅲ図へ進む。これは第Ⅰ図の概形である。アイデアが練られ、全体像と記入項目がその時点でほぼ決まった状態にある。空いたスペースへどんどん書き込んでいく。書き込み字数が多くなった場合は、枠を拡げればよい。矢印の大胆な使い方で、全体の流れをスムーズな図に転化させることも出来る。

第Ⅲ図は、筆者の第2ステップであるが、書き込むことが多すぎて果たして抱えている情報をすべて記入出来るか心配したところだ。結局A4判サイズで、小さなフォント「6」の字体まで使って、やり繰り算段のすえ仕上げたのが第Ⅰ図である。もう隙間がほとんどない、頗る窮屈な「私のPR・自己紹介図」となった。随分せせこましくてこれでは息を抜くことも出来ない気もする。一覧性の「図解」の主旨と建前からは、かなりかけ離れていると言えそうだ。

しかし、負け惜しみのようなものであるが、ここには「私のPR・自己紹介図」独自の特徴がある。まず本人にまつわる身近で個人的なストーリーとドキュメント、記録を出来るだけ網羅することこそが、この際一覧性以上に大切であり、人間的でアトホームな話題こそその人物を的確に表現する。その情報がA4判用紙に隅から隅までずい〜っと書き込まれているので、多少の見づらさは我慢しなければならない。空間をカラーフルな製図的手法でデコレートしてあるので、興味がないとか面白味がないということはまずない。やや品のない言い方だが、覗き趣味的側面もあり、一覧性とは乖離しているが、一般の興味と関心と呼ぶことは間違いないと思う。

五、知研の取り組みと提言

いま「図解」、そして図解的思考が俄かに世間の耳目を集めブームを呼んでいる。その実態は、お堅いと言われていた法曹界でも、再三久恒理事長を招いて講演会を催しているほどの傾斜ぶりである。難解な法律文書もいずれ「図解」化されるのではないかと秘かに期待されている。

さて、知研では久恒理事長と八木会長のリーダーシップのもとに、これまで各地で「図解」講座や講習会を開催し、世間から大方の評価をいただいていた。幸いにして現在自治体の中でも定例的に「図解」研修を実施しているところも多く、知研からも講師を派遣している。

そこで「私のPR・自己紹介図」に関して、早晚知研で次の二点を検討されることを要望したい。

その第一点は、前記したように研修の最終章で「私の仕事図」を描くことがカリキュラムに組み込まれているが、公務員やサラリーマンを対象にしている場合はそれでもよいと思う。しかし、今後「図解」を別の分野のマーケットに啓蒙し、さらに広く普及させていくためには勤め人以外の人たちをターゲットとして考えることが大事である。そのためには縷々説明

してきた「私のPR・自己紹介図」のような新しい「図解」を、「図解」マーケット拡大の有望な素材、資料としてとらえ活用し、発展させていくことが大切であると思う。特に、数年後に定年を迎える団塊の世代層を始め、定年退職者、自由業、学生、自営業者、フリーター、専業主婦等に対して極めて有意義であると思う。普段名刺を持たず何度も口頭で訴えて、漸く頭の片隅に記憶してもらえようような印象の与え方ではなく、「私のPR・自己紹介図」を一枚手渡すだけで、印象深く自分を売り込むことが出来る一種のプレゼンテーションを、新しいプロジェクトの柱として、また事業として確立させ、知研主宰で「私のPR・自己紹介図」講習会と、「図解コンサルタント」養成プロジェクトを検討されては如何と提言致したい。

もう一点は、「私のPR・自己紹介図」に関して、新しいプロジェクトとして知研の「私のPR・自己紹介図」活動が動き出せば、その中に作図コンサルティングとコンサルティングによる「私のPR・自己紹介図」作成代行を考えてみてはどうだろうか。これには、普及のためにある程度の時間が必要であるが、早晚需要が急増することは確実である。「私のPR・自己紹介図」が今後気軽に利用されそうな場面としては、当面面接とか、セールス外交の場ではないかと考えている。例えば、面接者と被面接者は、これまでのような判で押したような履歴書を携えて面接するだけではなく、容貌、雰囲気、話し方以外に、出来るだけお互いの長所、短所、特技、成長過程、思考回路、思想等を限られた時間内で知ろうとし、一方で売り込みたいと願うはずである。これを充分とは言えないまでも、一枚のペーパーである程度充足し、反映出来るとしたら、こんなに効率的で便利なものはない。その必要性が高まれば、作成方法についても要望が高まってくるのは必然である。

「図解コンサルタント」については、思うように図解出来ない人の要望に対して、図解コンサルタントがインタビューしながら「私のPR・自己紹介図」に表記したい希望を聞き出す。真実を聞いて、図解上に何を最も訴えたいかを相談しながら明快に表現し的確に図解する。そのためにいくつかのサンプルも作成用意しておく。出来れば身近な人のサンプルがあればよい。現存する人物の方がパンチが効いて効果的であるが、現存者はプライバシー問題が厄介で、どうしても当たり障りのない表現になる。そこで歴史上魅力的な人物等もいい。例えば、聖徳太子、織田信長、豊臣秀吉、ナポレオン、スターリン、ケネディ等々である。

いずれにせよ、図解「私のPR・自己紹介図」への興味と関心が高まり、一般に普く普及して、巷に「私のPR・自己紹介図」作成教室の看板が広く掲げられるのも夢ではないと考えている。

以上、知研が「図解（私のPR・自己紹介図）」講習会、並びに「私のPR・自己紹介図」作成コンサルティングをスタートさせるべく、早急にプロジェクト立ち上げを検討されるよう提言するものである。